

哲学者たちの反省会：あるいは、メタ哲学の上でのベルクソンとプロ野球選手の出遭い

村山 達也（東北大学）

本発表で私が行なうのは、私自身の仕事を素材とした、ボトムアップ型のメタ哲学の試みである。以下、まずは「メタ哲学とは何か」という点から、順を追って説明する。

【メタ哲学とは】

メタ哲学とは、哲学についての哲学、すなわち、哲学をめぐって生じるさまざまな問いを論じる哲学である。もちろん、哲学をめぐって生じる問いと一口に言っても多種多様である。「哲学書の平均価格はいくらか」とか、「書店員はいかなる基準で本を〈哲学〉の棚に分類するのか」、「哲学科の構成員の男女比率はどう変化してきたか」といった問いは、いずれも哲学をめぐって生じる問いだが、すべてが同程度に哲学の主題となるわけではないだろう。では、どのような問いなら哲学的な問いであり、延いてはメタ哲学の主題となるのか。ここにはすでに、「哲学的であるとはいかなることか」という、それ自体メタ哲学的な問題がある。メタ哲学を循環的でない仕方で定義するには、あらかじめメタ哲学的な問いに答えておく必要があるのである（と書くと、いかにもメタ哲学に固有の事情に見えるかもしれないが、言語哲学であれ、科学哲学であれ、結局は同じことだろう）。ただしここでは、その問いはひとまず措いておき、いくつかの問いを例として挙げることで、メタ哲学とは何かを示すことにしよう。すなわち、メタ哲学とは、「哲学とは何か」とか、「哲学はいかなる方法を用いるのか」、「哲学理論の優劣はどのような基準によって判定されるのか」といった問いを扱う哲学である。なお、これらの問いは、事実についてのものでも規範的なものでもありうる。つまり、例えば「哲学とは何か」という問いは、「哲学の名のもとにどのような営みが現になされている、ないし、なされてきたのか」を問うていることもあれば、「哲学はどのようなものであるべきか」を問うていることもあるのである。方法についても判定基準についても事情は同じである。上記の問いに「現に」や「べき」を適宜挿入すれば、二とおりの問いを容易に作ることができよう。

【メタ哲学の方法のいろいろ】

さて、このメタ哲学についても、「どのようなやり方で行なう（べき）か」という、いわばメタメタ哲学的な問い――しかし、メタ哲学もあくまで哲学である以上は、メタ哲学的でもある問い――を立てることができるし、その問いにはさまざまな答えがありうる。第一に

は、誰か（主に、過去の有名な哲学者）が表立って述べているメタ哲学的見解を検討するというやり方がある。第二には、誰か（同上）の仕事――メタ哲学的ではない、いわばベタ哲学的な仕事――を分析し、そこで目指されていること、達成されたこと、用いられている方法などを取り出して、批判的に吟味する、というやり方もある。さらに第三に、個々の事例からは離れて、抽象的なレベルで問いを立てることもできる。概念分析とはいったい何なのか、直観は証拠たりうるか、哲学は科学と芸術のどちらに近いのか、といった問いである。以上の列挙はべつだん網羅的というわけではないが、いったんここまでにしておこう。

【本発表の課題】

本発表で私が採用するのはこれらのうちの第二のもの、すなわち、誰かのベタ哲学的な仕事を分析し、そこからメタ哲学的な見解を取り出すという方法である。ただし、「誰か」に代入されるのが私自身であるところに特徴がある。私自身が過去に行なった発表や、かつて書いた論文を、自分で分析しようというわけである（このアイディアは、先日の応用哲学会における笠木雅史氏の発表に負う）。そのことをつうじて、一つには、それらの仕事において私はいかなる方法やスキルや知識を用いていたのかを取り出すことを目指す。もう一つには、それらが一応は哲学の体をなしていると自分で判断したのはなぜか、また、そこでの成果が物足りなく感じられるとしたらそれはなぜか、といった問いを考察する。そうした判断や感じは、哲学とはどのようなものである（べき）かについての、私自身の（必ずしも意識化できていない）意見を反映していると思われる。この二つめの作業をつうじて、その意見を明確化しようというわけである。

以上の二つの試みが、本発表の本体をなす。すなわち、自分自身を素材とする、ボトムアップ型の哲学方法論であり、哲学本質論である。なお、こうした作業の意義と正当性については、私も論じるつもりだが、笠木氏が主に論じる予定である。笠木氏の要旨も参照されたい。

【課題についての但し書き】

二点ほど注記を。まず、本発表では私の二つの仕事を分析対象とする。一つは哲学史に関わる仕事であり、もう一つは、端的に哲学と呼ぶほうが適切であろう仕事である。とはいえ、前者はただたんに歴史を調べているだけではなく、何かしらの哲学的スキルを駆使しているだろうし、後者も、完全に哲学史を無視しているわけではなく、哲学史の知識をいろいろ活用しているだろう。せつかく哲学と哲学史研究という二種類の仕事を題材とするので、それぞれについて論じる際には、どのような相互利用がなされているのかという点にも留意

しつと検討するつもりである。

注記その二。上に述べた反省作業を行なうにあたって、私はあることを前提している。すなわち、本発表が分析対象とする仕事において、私は（少なくとも部分的には）哲学をしている、ないし、しつとあるということである。ただし、理想的な仕方ではない／しつとあるとまで主張するつもりはもちろんない。むしろ、いちばん知りたいのは、どうすればもっと巧みに、ないし優れた仕方のできるのか、ということである。だから、私がここで行なうのは、言葉の日常的な意味における反省――よくなかった点を突き止め、よくなかったと認めて、改めたいと思うこと――なのである。そういうわけで、本発表で提示されるのは、いうなら、メタ哲学の反省会モデルである。

【分析対象の紹介】

最後に、二つの分析対象をそれぞれ簡単に紹介しておく。

一つめは、ベルクソン『物質と記憶』をめぐる開催されたシンポジウムでの発表「ベルクソンにおける潜在性概念」である。前半六割ほどは、論文「潜在性とその虚像――ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」としてすでに活字化した（平井靖史（他）編『『物質と記憶』を診断する』書肆心水、二〇一七）。また、二〇一九年のうちに、後半もあわせた全体を、解説論文としてまとめる予定である。いま述べたような（いわば）切り売りしやすいのは、奇妙に聞こえるかもしれないが、要求される項目が多いという、哲学史研究に特有の事情が関わっているように思われる。この点についても本発表では詳しく説明する。

二つめは、東北大学とグルノーブル大学の学術交流の一環として開催されたシンポジウムでの発表「他者のもつ、究極的で、それゆえ道具的な価値――セティヤの「利他主義のパラドックス」の検討」である。結論の詰めが甘く、眼目もはっきりしないように思うのだが、もう少し手を入れればもっとよいものにできるのではないかとも感じている。そのため、シンポジウムの記録には要約だけ投稿し、もっとよい論文にするべく練り直す予定である。その練り直しにおいては、「どうすればもっとよくなるのか」を考えることになるわけだが、その際には、少なくとも暗黙のうちに、哲学のよさについての規準を用いることになるはずである。本発表では、その基準のほうに焦点を合わせ、明確化する作業を行ないたい。

ベルクソン論文・発表版：<https://bit.ly/2KCFsMR> (academia.edu のページ)

ベルクソン論文・書籍掲載版：<http://www.shoshi-shinsui.com/book-bergson2016.htm> (出版社のページ)

利他主義論文：<https://bit.ly/31k1R7H> (academia.edu のページ)